

## 中世の五感とWundt使用の実験器具

英語英米文学科 田崎 権一

私は、本学赴任（2013年4月）直後に、「文彩BUN-SAI（第四号）－熊本県立大学創立六十周年記念特集－」（2008年3月）で、小辻梅子先生の“貴婦人と一角獣”と題し、「パリに行ったら会いたい女性がいる。…」とはじまる文章を拝読した。パリの国立中世美術館（クリューニ美術館）に展示されているタペストリー（毛織物の一種）のことである。タペストリーに描かれた寓意、人物の説明、現在に至るまでの顛末など書かれていた。

このタペストリーは6枚から成り、人間の五感「視覚」「聴覚」「味覚」「嗅覚」「触覚」と「我が唯一の望み」が描かれている。今年（2013年）4月から10月にかけて、東京と大阪の国立美術館でも「視覚」が展示された。

学生の海外研修に同伴して私がパリに初めて行ったのは、1997年12月下旬であった。出発前から「五感の素晴らしさが描かれている」と旅行案内書にあるので、中世に五感がどう表現されたのかと関心を持っていた。実際の国立中世美術館は、薄暗い館内（中世の修道院）で、古くて、華やかでもなく、いかにも神中心の「中世」という印象だった。私は、「一角獣をつれた貴婦人」が展示されている筈の部屋を何度も後戻りしながら確認しようとしたが、十分に納得しないままに退出した記憶がある（現在はインターネットでも確認できる）。

その後、日本経済新聞記事（2005年11月20日付「美の美 ー一角獣がやってきたー」）（写真付）によると、表現は素晴らしく繊細であるが、内容は華やかさを捨て去り、五感の素晴らしさを啓示する贈り物として制作され、またさらには五感を超えた何か、第六感を暗示しているという説もあるそうだ。いろいろな研究者が寓意を解明しようと試みているらしい。当時の感覚の象徴か、視覚は鏡、聴覚は携帯型オルガン、触覚は一角獣の角への触、嗅覚は花冠、味覚は砂糖菓子が描かれている。「貴婦人の魂の状態」は、感覚様相と年齢とで対応させ、「嗅覚は子供時代を表す。味覚は思春期。…視覚は瞑想する姿。触覚は哲学的な思索」と発達段階を表現しているとの解釈もあるそうだ。ルネサンスの「感性の解放」など人間性中心を背景に、感覚の素晴らしさが織物に表現してあるのだろうか。「我が唯一の望み」は、感覚

に留まらない、感覚を超えた理性とかではないかともいわれている。

もし今度行けることがあったら、小辻先生の文章をよく読んで、今度は時間をかけてじっくりと鑑賞したい。

2009年3月、今度は家族と行き「医学歴史博物館」（パリ大学医学部）に立寄った。受付後、講堂のような部屋の上段ギャラリーに「Wundt ヴントが使用した生理学用の実験装置」が展示してあるのを見つけた時、感動を覚えた。彼はライプチヒ大学に世界初の心理学実験室を創設（1879年）した人物で、心理学史上、科学的心理学の父とされている。

「心理学」とは一見関係がなさそうな観光での博物館や美術館訪問でも、心理学的な思索の契機、感動、心理学史との出会いを体験できることがあると思われた。